



まちかど

街角

Snapshot

2

スナップ

スマイル

写真 ■ 平山 利男
文 ■ ねびる なおみ

「スマイル」は、ビーチ・ボーイズが決して笑うことができなかったアルバムとして知られる。一九六七年に諸事情からこの作品集の未完成のままのお蔵入りが決定すると、その挫折感からグループの音楽的支柱で当時まだ二十代半ばだったブライアン・ウィルソンは精神を病み、以後二十年以上にわたって半隠遁生活を余儀なくされる。中心メンバーを欠いたビーチ・ボーイズも、解散こそ免れたもののデビューから続いた快進撃は急速に失墜し、往年の人気や影響力を再び取り戻すことはなかった。失ったものの大きさを考えれば、彼らが笑うことができなかったのは至極当然と言える。

幻のアルバムに終わった「スマイル」は、天才ブライアンの創作活動の絶頂期の記録として、また次第に漏れ伝わった録音時の彼の奇行ぶりなどから、後日数々の伝説を生んでゆくことになる。そして制作中止から実に三十七年の後、伝説に一挿話が加わる。二〇〇四年、ブライアンのソロ作品としてついに再録音版「スマイル」が発表されたのだ。さらに昨秋、とうとうオリジナル録音であるビーチ・ボーイズ版「スマイル」が登場した。

アルバム全体が魅惑的な小曲の組み合わせによって構成され、美しいヴォーカル・ハーモニーがめくるめくように流れてゆく「スマイル」。その音世界は、ストラヴィンスキの「春の祭典」が世の中のあらゆる命の躍動を小曲によって次々と鳴り響かせ、しまいに大地全体の息吹を見事に立ち現れさせるのに似ている。また再録音版とオリジナルとの違いは、音像の生々しさという一言に尽きる。当時のぎりぎりのスタジオ・ワークの雰囲気そのまま封じ込めたオリジナル録音は、今も何物にも代え難い輝きと迫真性を放っている。